

つたが、夏御所のあつた處はカーピシーの都であつたことも吾人の承知する所である。猶ほ又バーミヤーン(之れを含まず)から健馱邏(之れを含む)にかけて玄犇法師が通過した各地は勿論、其の歸途通過したバンヌやガズニなども皆カピシヤ國に屬してゐたものである。イランと印度の中間地區たる此の地方には常に、ヒンヅクシー越の出口となる邊にどうしても一大商業都市があつた筈で、只だ其の要地が昔は今よりも十五里北方にあつたと云ふだけの違ひに過ぎない。「バーブール帝に關する記録」(Memoris of Babur 二〇二頁)中、當時のカーブールには印度の物産の外に猶ほ「コラサン Khorasan, ルーム Roum, イラク Iraq 及び支那などの物産があつたと云ふことを讀んだ時、此の一句は玄犇法師がカピシヤのことを述べるに當つて「其處には諸外國の珍しき商品豊かなり」と記述した文句の反響の如く感じたが、集散市場の地位から云ふと現在の首都は、北方コヒスターン方面にあつた古くからの競争都市の地位を奪つたと云ふに過ぎないことが明白である。然らば、其の集散市場たる地位の移轉は何時行はれたものか、又その結果、同時に本道もカーブールに迂回する